怪力乱神帖

和田陽平

子、怪力乱神を語らず

論語　述而第七

だが、冷徹なプロスペル・メリメは魔法、予言、山賊などに異常な関心を持ち、卓抜な論理的頭脳の持主E・A・ポオは好んで怪異の物語を書いた。まことに怪力乱神こそは文明人の持つ郷愁といったものではなかろうか。

怪しい夢のこと

安永十年丑の春、花田仁兵衛は川普請の御用で、たまたま武蔵の国押立村―現在の府中市押立町―に宿を取った。その部屋はおもやから廊下続きで離れており、戸垣もまばらで、表に藪が生い茂り、不用心に見えたので、戸じまりをよく改めて床に就いたが、とろとろと眠りかけた頃、天井で何か大石などの落ちたような音に目を覚すと、枕元に、よごれた縞の単物を着た

座頭が手をついて居る。脇差を取って起上れば姿は消えてしまった。さては心の迷いかと、戸締りを確かめて床に入り、眠りかかると、また先程の座頭が出て来て、今度は両手を広げて覆いかぶさって来る。布団を撥ね除け、脇差を摑めば、途端に消え失せた。　――耳袋・妖怪なしともきめ申しがたき事――

私にも、少しばかりこれと似た経験がある。昭和十四年の九月、朝鮮の京城―現在のソウル―に赴任した私は、東崇町の先輩を尋ねて、泊めて戴いたことがある。その部屋は居間から一寸離れた客間であった。スタンドを消して眠ると、何となく布団の裾の方から枕元の方に人の歩く気配がして、はっと目が覚めた。目が覚めれば静まり返って何の音もない。明りをつけたが、勿論、何の異状もない。明りを消して眠りかけると、また枕元に近づく微かな音がする。目が覚めれば何の音もない。鼠かとも思った。動いていた鼠が、私が目を覚した気配を察して静まるのではないか。私は暗闇のなかで、全く身動きをせずに、しばらくの間、じっと耳を澄すことにした。鼠ならば動き出すだろう。だが、いつまで待っても音はしない。つい、うとうとと眠りかかると、また枕元に近づいて来る音がして目が覚めた。

このあたり一帯は、昔の墓場であったらしいと、大分あとで聞いた。

人魂のこと

どうも、人魂はあるらしい。

飛んでいる人魂をステッキで突いて、その先を触ってみたら冷たかったという報告が、イギリスの物理学雑誌のフィロソフィカル・マガジンの大変古いところに載っているそうである。これを読んで、しきりに感心している寺田寅彦先生に、弟子の一人が、一体こんなものの何処が面白いのですかと尋ねたら、先生は、これこそ科学者の実証的精神ではないかと申されたという。

私の父は夜更けて帰る坂道で人魂を見た。それは夜空を、波に漂うように揺れ動きながら、道を横切って、崖の暗闇に消えて行ったそうである。

私は幼い頃、死んだ金魚を、池のほとりの薔薇の根もとに埋めた。それから、しばらく経った五月雨の降る宵、椽側から暗い庭先を眺めていた母が、小さい声で、あっと言った。薔薇の根もとから小さな火の玉が出て、一尺程のぼって、糠雨のなかに消えたという。魚魂という言葉はないので人魂と言わせて貰

う。小指の先ほどの可愛い金魚の人魂は、出た途端に消え失せた。

だが、私は人魂を見たことがない。残念である。

天神山ひょろひょろのこと

幼い頃、お化けの夢に怯えるたびに、「お化けは箱根の山からこっちには居ないんだよ」と母に宥められて安心したが、そうは言っても、お化けの話を聞けば矢張り怖い。

当時、私の家は横浜の西戸部町字山王山で、坂道を下りて、伊勢町の交番から左に折れた先が「くらやみ坂」。昔の首斬り場の跡が小さな空地になっていた。左に曲がらずに、かどの焼芋屋のところをまっ直ぐ行くと、御所山や天神山へ行く。御所山は床屋の裏の細い露路を曲った所に、古い小さな五輪塔があり、御所の五郎丸の墓と言い伝えられているからである。天神山の由来は知らない。

「くらやみ坂」の御仕置場跡のあたりで、私は年上の子供から恐ろしいお化けの話を聞いた。夜になると天神山から「ひょろひょろ」という大変凶悪なお化けが出てくる。それはただ、紐のように長いお化けであって、どんな細い戸の隙間からでも平気で入ってくるという。

寺島良安著わすところの『和漢三才図会』所載の人魂の図は、恰も電気水母のように、丸い頭を持ち、細長い尾を引いている。ところが「ひょろひょろ」に至っては尾頭も心もとない唯ひょろひょろと長いばかりの化け物だから、いっそ気味が悪い。頭がないから、どんな隙間でも平気で這入れるのだろう。

私はこの話を聞いてから、日が暮れると、ますます怖くなった。夕飯の膳に向っても、全くふさぎ込んで、果てはべそをかいた。心配した母に尋ねられて、一部始終を話した途端、父、母、兄、姉全部の大笑いとなり、私も毒気を抜かれた形で、不思議と怖くもなくなった。

その後も何ぞといえば「陽ちゃんの天神山のひょろひょろ」と、笑い話にされた。

だが、考えてみれば、尻っぽだけの紐みたいなお化けが、蛇のようにぬたくって、空を泳いで来たら、矢張い怖いのではないだろうか。

化け物仕返しのこと

九州の、さて、何処であったか、蒟蒻(こんにゃく)のおばけの出る所があ

るそうな。

そんな馬鹿なものがあるものか。第一、蒟蒻とは間が抜けていると、大声で強がりを言って歩いていたら、突然どこからか、「異ナ事コクキャア」と破鐘のような大音声と共に、天から数十畳敷もあろうという、べらぼうな大こんにゃくが目の前にぶらさがった。

化け物が仕返しをしたという話はいろいろあるが、馮大異ほど、ひどい目にあった男は、まずあるまい。

昔、中国は元の時代、蘇州のあたりに、馮大異という男がいた。当世風に言えば無神論者の偶像破壊主義者で、何かを祭る祠を見るたびに焼き払い、像を沈めた。或る日、たまたま用があって近くの村へ出かけたが、途中で日が暮れた。その辺は見渡す限りの荒野で、人家もなく、兵乱のあったあとで、骨や屍体が散らばっている。雲行きが怪しくなったので、樹の下で休んでいると俄かの吹き降り。雷が鳴ると突然そこいらの屍体が起き上って走って来る。慌てて樹に逃げのぼると、屍体は樹の根もとで、摑えろ摑えろと騒ぎまわる。

そのうちに雨がやんで、雲の間から月が出た。すると、大きい青鬼が現れて、屍体を片っぱしから摑えては、瓜でも嚙るように食べ尽して寝てしまった。寝ているすきにと、樹を降りて逃げ出すと、鬼は気が付いて追いかけて来る。命からがら荒れ果てた古寺に逃げ込んだが、そこには本堂に、大きな仏像が一つあるばかり。その背中の穴に飛び込んで、やれ助かったと思ったら、仏像がげらげらと笑い出し、「思わぬ御馳走が腹に入ったわい」と立ち上って歩き出した拍子に敷居に躓いて、ばらばらに壊れ、大異はやっと腹から出ることが出来た。

ほうほうの体で寺をとび出すと、遙か彼方に灯が見えた。ほっと安心、駆け寄って見れば、首のないもの、手のないものなど化け物達の酒盛りの真最中。大異を見付けると「うまい肴がやって来た」と一斉に立ち上る。仰天して闇雲に逃げ走ったら、底の知れない涸井戸に落っこちた。井戸の底には大勢の鬼、化け物共打ち揃い、鬼王を頭に待ち受けていて、今日こそは、この生意気者に仕返しをしてやるぞと、大異を裸にし、石の俎の上にのせ、粉を捏ねるように転がせば、身体は延びて、たちまち身の丈三丈余り。竹竿のようにひょろひょろ歩けば鬼どもは手をうって囃したてる。苦しさに堪え兼ねて、背を低くして呉れと頼めば、また俎の上で捏ねると、今度は一尺ほどに縮まって、団子のような身体で地べたを蟹のように這いまわる。散々笑いものにした挙句、もとの背丈に戻したが、思い知らせるためとばかりに、鬼共寄ってたかって、大異の目に青い玉を嵌め、

髪を赤く染め、口に烏天狗のような嘴をくっつけた。

大異はやっと町に帰ったが、逆立つ赤毛に青く光る眼の烏天狗では、町びとは恐れて逃げまわるばかり。憤りの余り、家に閉じ籠って食を断ち、死んで天帝に訴えるとて、自ら命を断った。

——剪燈新話・太虚司法伝——

こんな念の入った仕返しは、余り類がないだろう。訴えは天帝に聞き届けられ、悪鬼どもは悉く、滅ぼされたということになっているが、さて、そうなると無神論者が勝ったのか負けたのか、私には分らない。

※

（附記）こんにゃくのお化けは五十年余りも昔に読んだ事として、九州の何処だか忘れてしまったし、お化けの科白も間違っているようである。識者の御教示を得たい。

剪燈新話もまた五十年余り前に読んだ葵文庫所載の江戸時代の翻訳の記憶による。江戸時代とは言っても、浅井了意の「伽婢子」のような翻案ではなく、直訳体のものであった。今は入手不可能なので、飯塚氏訳の現代語本で記憶を補った。筋書しか書けなかったが、太虚司法伝は剪燈新話二十篇の説話のなかでも出色のものだと、私は思う。

（明星大学）